

18世紀初頭のイギリス女性と書く事*

松原慶子

そもそもいつの時代から女性がペンを執り初めたのか、それはわからない。17世紀初頭における全出版物の中に女性のその占める割合は、僅か0.5%であったという。⁽¹⁾多くの障害にも拘らず女性はペンを捨てなかった。拙稿でこれから扱う18世紀初頭というのは、当時のジャーナリズムの勃興と相俟って、「イギリスの女性では初めて」という形容句を冠せられる女性が登場した時代である。少し遡るが、初の女性職業作家 Aphra Behn (1640-89)、初の女性政治ジャーナリスト Mary Delarivière Manley (1663?-1724)、イギリス初のフェミニスト Mary Astell (1666-1731)⁽²⁾ などなど。

しかしだからといって広く女性が文章を物していた訳ではない。時代は依然として女性がペンを執る事に、まして書き物を世に出す事に厳しい批難の目を向けていた。ではそのような時代に敢えてペンを執った女性達にとって書くという行為は何であったのか、彼女達は何を語り、何を主張しようとしたのか、それを検討するのが本稿の目的である。手紙、回想録といったジャンルを取り上げたのは、当時未だ自我の概念が確立していなかったとはいえ、そこには直接的な形で自己主張が表出されやすいからである。⁽³⁾

以下に取り上げる4人の女性、Celia Finnes (1662-1741)、メアリ・ドラリベール・マンリー、Sara Churchill、Duchess of Marlborough (1660-1744)、Lady Mary Wortley Montagu (1689-1762) は、異なる社会階層、家庭環境、政治的宗教的傾向を代表しており、異なる文学ジャンルにおいてそれぞれ、自分が直面する問題に対処しようとした。結論を先取りして述べるならば、彼女

達に共通しており、そして多分当時ペンを執った女性達に共通していたのは、女性である事と執筆が深く関わっていた事である。彼女達は女性であるが為に、社会から孤立した閉ざされた家庭生活という問題、教育や経験の欠如の問題、恋愛、結婚、性道德の問題等に直面していた。そういった問題の解決を模索し、あるいは社会に抗議し、あるいは自己主張の為に彼女達はペンを握ったのである。そして彼女達の自我の意識はそういった問題を軸に展開してゆき、ひいては自己のアイデンティティを探る事になるのである。

だからといって彼女達は戦うフェミニストでもなければ、問題の全貌を、その本質を正確に把握していた訳でもなかった。又、彼女達がペンを執る事自体、女性としての領分を踏みはずす事として批難、抑圧の対象となった。恐らくこの2つの理由から、彼女達のペンを執っての自己主張の過程は屈折し、社会に対し防御的、弁解的、妥協的態度をとる事となる。この弱い公的な自我の有り様と、執ように自己主張の術を探る意外に強い私的な自我は、その対照が注意を引く。以下、4人の女性を順次検討していきたい。

I

まず最初にシリア・ファインズを取り上げるが、彼女に関する伝記的事実は殆んど残っていない。1662年 Salisbury 近くの Newton Toney に生まれた。祖父は初代 Viscount Saye and Sele、父は Colonel Nathaniel Fiennes。ピューリタンの家系で、Civil War では議会派として戦っている。彼女自身も nonconformist。1691年頃、多分結婚した姉の許である London に移り住む。1685年から1703年にかけて数度にわたりイングランド全土を旅行し、その記録を残した。生涯独身。

数篇にわたる旅行記をまとめたファインズは、冒頭に *To The Reader* と題する序文をつけた。その事自体、彼女の言葉とは裏腹に彼女に出版の意志があった事を示しており、(ちなみに実際に世に出たのは1888年の事である。)書く事が彼女にとっての自己主張であった事がわかる。しかし序文は次の様に始まる。

As THIS was never designed, soe not likely to fall into the hands of any but my near relations, there needs not much to be said to excuse or recommend it. Something may be diverting and proffitable tho' not to Gentlemen that have travelled more about England, staid longer in places, might have more acquaintance and more opportunity to be inform'd.⁽⁴⁾

冒頭における「近親者」という読者の限定は、書く事が即読まれる事につながる当時の女性の状況を暗に示しているが、同時に、女性にあらざる行為をしている事への弁解であり、社会の非難をそらす為のポーズでもある。この姿勢は、この旅行記が読者に対して持つ価値、旅行記が書かれる経緯の説明にも一貫している。彼女が女性である事の意味なり、差別感と迄はいかないが男女の差異をはっきり意識していた事は、旅行の効用を説く際に女性と男性を分けている事からもそれとわかる。

このように女性である事の下に隠された彼女の自己主張は、次の箇所当りで微妙に変化している。

But much more requisite is it for Gentlemen in general service of their country at home or abroad, in town or country, especially those that serve in Parliament, to know and inform themselves the nature of Land, the Genius of the Inhabitants, so as to promote and improve Manufacture and Trade suitable to each and encourage all projects tending thereto,... but to their shame it must be own'd many if not most are ignorant of anything but the name of the place for which they serve in Parliament; how then can they speak for or promote their Good or redress their Grievances?⁽⁵⁾

彼女が、現実には職業を持ちあるいは政治にたずさわる男性がそれにふさわしい知識も情報も持たず、その為に果すべき任務を遂行できていないと述べた時、彼女は自らの旅行記の持つ価値をはっきり意識し、強い自負を抱いていた。男

性と女性の境界をこえていた。

当時の状況を考慮するならば、彼女の自負も納得のいくものとなる。旅行及び旅行記が隆盛を迎えるにはまだ数10年を要し、未整備な道路交通網、貧弱な宿泊施設、追剥等の危険をおして、彼女は単身あるいは母なり姉と下僕を従え旅行したのである。William Camden (1551-1623) の *Britannia* (1586) が殆んど唯一のガイドブックであった。その彼女の物した旅行記は Christopher Morris の言葉を借りるなら、「ブリタニア」以降初のイングランド全土にわたる旅行記となったのであり、G. M. Trevelyan が愛読し、著書にも引用したのである。ちなみに彼女と好一対とされる Daniel Defoe (1660?-1731) が旅行したのは1706年から数年にかけての事であり、1724-26年に出版されたその旅行記 *A Tour Through the Whole Island of Great Britain* は、ファインズのものとは異なり、事実とフィクションがないまぜになっており、又、2次資料も多く含んでいるのである。

さて、この彼女の自負には “But now I may be justly blamed to pretend to give account of our Constitution, Customs, Laws, etc., matters farre above my reach or capacity, but herein I have described what have come within my knowledge.”⁽⁶⁾ という卑下が続く。彼女は男性と女性、自負・自己主張と卑下・弁解の間を揺れ動いている。しかし序文の最後で彼女が読者に、特に女性の読者に向かって “the study of those things which tends to improve the mind and makes our Lives pleasant and comfortable as well as proffitable in all the Stages and Stations of our Lives”⁽⁷⁾ を勧める時、彼女は新しい戸口に立っていた。つまりファインズは、当時の女性の日記や覚え書が示す宗教的内省の世界、因習的な家庭生活の閉ざされた世界からより広い世界へと女性の目を向けようとしたのだ。その世界を理解し、隣人への奉仕といった活動の場をそこに見出すという女性の可能性への展望を、自らの旅行記に託したのである。

その彼女の描いた旅行記の世界は、どのようなものだったか。彼女は旺盛な好奇心で観察に徹し、都市を結ぶ道路や橋の状態、街並の様子、旅館とその食事、温泉、教会や dissenters の事、country house とその庭などを詳述した。しかし何故か歴史には興味を示さず目を未来に向け、社会進歩主義者として、

その土地土地の主な産業や商業の紹介に力を注ぎ、囲込みや穀物、鉱業、物価の話題に余念が無かった。

個人的感想や自伝的要素を伴わない情報に溢れた旅行記というのは18世紀イギリスの伝統として当然であるが、ではその中でファインズはどのような形で登場するのだろうか。彼女は行く先々で、親族、一族の許に身を寄せている。そのファインズ一族とは言う迄もなく dissenters であり、結束は固い。彼女のアイデンティティは女性という事にはなく、ファインズ一族の者という事があり、彼女の価値観なり共感は dissenters と共にある。満載された情報をぬって登場する彼女の姿は、まさにそのようなものであった。

当時 dissenters はイギリス社会において、抜け道があったとはいえ公式には公職から閉め出されており、疎外された状況にあった。しかし独自の教育施設などを持ち、その勤勉精神でもって勃興しつつある新しい産業社会の強力な荷い手となっていた。彼女がその新しい産業社会を賞讃してやまなかったのは、理由があつての事だったのである。彼女はある町なり産業の衰退を、単純に人々の怠惰と結び付けさせたのである。次に彼女の旅行記の典型的な例を長くなるが1つ挙げておく。眼前の事物への細かい観察眼、産業の繁栄への関心、繁栄を支える dissenters への暖かい目と神への感謝が混在している。

This is the biggest place in the town and the streete very broad and runs off a great length, and most of the streetes are very good; the buildings are most of timber work and old; there is a Water house at the end of the town which from springs does supply by pipes the whole town with water, in the manner that London is, there is also a water which serves severall mills that belong to the town; it seems to be a thriving good trading town and very rich, they have a publick stock belonging to the Corporation above 3 thousand pounds a year for publick schooles charity and maintenance of their severall publick expenses, of their Magistrates and Companyes, the majority of the heads are now in the sober men's hands, so its esteem'd a Fanatick town; there is indeed the

largest Chapple and the greatest number of people I have ever seen of the Preſbyterian way, there is another meeteing place in the town of the Independents which is not so bigg, but tho' they may differ in some small things in the maine they agree and seeme to love one another which was no small satisfaction to me, Charity and Love to the brethren being the characteristicall marke of Christs true Disciples.⁽⁸⁾

さて、ファインズ個人で言えば、この当時のイギリス社会での dissenters の有り様は、前に挙げた序文における彼女の、ひいては女性の望ましい姿と奇妙に重なってくるように思われる。つまりファインズは女性として男性社会とは隔絶した世界に置かれながら、正面から対立する事もなく、自らの経験、知識によって、男性が新しい社会を建設してゆくその助けを確実に差し出しているという事である。こうして彼女の自意識なり自己主張は、社会と dissenters の関係、男性なり男性社会と彼女自身や女性の未来像との関係の重なり合った図式の中におさまって、尖鋭化する事もなく終わったと思われる。

ファインズは dissenters として、宗教的目的とはいえ女性がペンを執る事を勧める雰囲気の中にあつた。加えて彼女には、自らの経験を他人に供するという積極的理由もあつて、古いタイプの宗教者の日記、旅行記から新時代の旅行記への脱皮を成し遂げた。しかしその旅行記が僅かとはいえ古い痕跡を引きずっているように、彼女自身も男女の差別を差異と感じるにとどまった。この彼女の弱い自己主張の故か、遺言の中で彼女は旅行記についてふれていない。

しかし次に述べるマンリーは、生活の為にペンを執った。職業作家として人々に存在がさらけ出されているだけに、自己主張も強くならざるを得なかったようである。

II

メアリ・ドラリベール・マンリーは初期女性職業作家として、アフラ・ベン、Eliza Haywood (1693? - 1756) と並び称せられるが、他の2人と異なり、後

の scandalous memoirs⁽⁹⁾の先駆ともなる自伝的作品を残した。この回想録の類は、何故スキャンダラスなのか、又、スキャンダラスと烙印される事を承知で何故敢えて彼女達は書いたのかという点で、当時の女性のおかれた状況を写し出している代物なのである。

マンリーは、旧家の出で Cavalier である Sir. Roger Manley を父に持ち、思想的に忠実な Tory となった。学問を好み著作を物した父の許で liberal education を受けた。父の死と共に保護者となった従兄の John Manley に騙され結婚し子をもうけるが、彼は重婚者である事が発覚し、彼女は女性としての名誉を失墜する。彼の許を逃れ、一時 Charles II 世の元愛人の世話になるが、文筆で生活を立てるべく、劇、鍵小説、秘史、政治パンフレット等を出版し、1度は逮捕の憂目にあう。その間何度かの恋愛遍歴の相手は、弁護士で国会議員であったり、後のロンドン市長⁽¹⁰⁾など。

マンリーが作家になったのは、彼女が女性だったからである。重婚が暴露されても、ジョン・マンリーは何ら社会的制裁を受けないが、彼女は genteel society から放逐される。そのような女性にとり、生計を立てる手段は2つ。1つは誰かの愛人となる事。1つは物書きとなる事である。当時女性に対し就職の道は殆んどひらけておらず、一応の教育があれば物書きは、手っ取り早い生計の手段であった。

その彼女が“softer passions”をテーマに取り上げたのも、彼女が女性だったからである。何故なら、そのようなテーマであれば、マンリー自身も認めヘイウッドも *The Fatal Secret* (1724) の献呈の辞で述べているように、女性であるが為の教育、知識、巾広い人生経験の欠如はさして障害とならず、女性作家の得手の分野として成功への近道(“gentle love stood ready to afford an easy victory”)であった。又、女性作家に期待されている事でもあった。トーリー派の論客としての彼女の政治的書き物も性的スキャンダルの暴露といった方法に依る所が大きかった。

しかし作品が成功し作者の名が売れると、“不道德”だという非難も一方で激しくなるというジレンマを抱える事になる。マンリーは自己弁護の為、自伝的エピソードなり自伝的作品を書く事になった。その為か彼女のその種の書き

物には明らかな特徴がある。つまり、イギリス初の女性政治ジャーナリストとして活躍し、Jonathan Swift (1667-1745) にそれなりの評価をうけ、彼の後を継いで *The Examiner* の執筆者兼編集者となったりしたにも拘らず、⁽¹¹⁾ そういった側面に殆んど触れていない。専ら当時のダブル・スタンダードによる私生活の不道徳性への非難に対する弁護となっている。又、彼女が重婚により破滅していくというエピソードを扱った、*Secret Memoirs and Manners of Several Persons of Quality, of Both Sexes from the New Atlantis* (1709) と自伝的小説 *Adventures of Rivella* (1714) では、執筆当時の状況の違いによって自己弁護の姿勢が異なっており、状況に対し迎合的に、社会に対し弁解的になっている事である。

The New Atlantis は Marlborough 公爵夫妻を中心とする当時の宮庭の腐敗墮落をスキャンダラスに暴きたてた鍵小説であり、忽ちベストセラーとなって夫妻の政治的追い落としに決定的影響を与えた。⁽¹²⁾ この前後数年間の彼女の執筆活動は最も盛んで高い人気を博した。しかし腐敗を糾弾する人間が不道徳の非難を受けては糾弾の力を弱める事になる。その為4ヶ月後に出版した *The New Atlantis* 第2巻には、重婚に至る経緯を、自らが攻撃してやまぬ腐敗墮落の蔓延の犠牲者として、つまり世間知らずの無垢な娘が手管にたけた男に欺されるというエピソードとして挿入した。そして1度名誉を失墜した女性を決して許さないダブル・スタンダードを激しく攻撃した。

When by degrees I began to look abroad in the World, I found the Reputation I had lost, (by living in such a clandestine manner with Don Marcus) had destroy'd all the Esteem that my Truth and Conversation might have else procur'd me. O, nice unrelenting Glory! is it impossible to retrieve thee?... Unequal distribution! Why are your Sex so partially distinguish'd? Why is it in your Powers, after accumulated Crimes, to regain Opinion? When ours, tho' oftentimes guilty, but in appearance, are irretrievably lost? ⁽¹³⁾

名誉の喪失に絶望し、不合理な女性差別を呪うこの調子の激しさの中には、単なる自己弁護以上のものが読みとれる。つまり当時の彼女をトーリー派の論客たらしめた彼女の生い立ち、Cavalierの娘としての誇り、彼女自身の今は失ってしまったアイデンティティの確認である。

5年後にフィクションの形をとって「リヴェラの冒険」を出版する頃には、社会情勢は変化していた。第一にアン女王の死で政権はホイッグに移り、マンリーは身の危険を考えると政治的書き物を断念せざるをえなかった。そして生活の為には又、恋愛小説作家として出直す必要があった。第二に同名のスクェンダラスな彼女の伝記が出版されそうになり、それを阻止する為に自ら自伝を書かざるをえなかったという事である。

自伝には、他人に抱いて欲しい自己のイメージを提示するという傾向があるが、マンリーは「リヴェラの冒険」の中で、評判芳しからぬ私生活をさらけ出すとみせて、逆にそこから可能な限り好ましいイメージを創造しようとした。

物語は、リヴェラ（マンリーを指す）を恋する Sir Charles Lovemore が友人に彼女の人生を語るという形式になっている。エピローグに白く、

Her Virtues are her own, her Vices occasion'd by her Misfortunes; and yet as I have often heard her say, *If she had been a Man, she had been Without Fault*: But the Charter of that Sex being much more confin'd than ours, What is not a Crime in Men is scandalous and unpardonable in Women, as she herself has very well observ'd in divers Places, throughout her own Writings.... Few who have only beheld her in Publick, could be brought to like her; whereas none that became acquainted with her, could refrain from loving her. I have heard several Wives and Mistresses accuse her of Fascination: They would neither trust their Husbands, Lovers, Sons nor Brothers with her Acquaintance upon Terms of the greatest Advantage.⁽¹⁴⁾

マンリーが終生機会ある毎に、ダブル・スタンダードを攻撃したのは事実であ

る。しかしこのエピローグにみられる“美德”と“悪徳”、“生れ”と“環境”、“男と女”、“公”と“私”といった二分法は、ダブル・スタンダードに対する攻撃というよりもむしろ、それにより非難されている自分を正当化する事に力点を移している感がある。非難されるべきなのは、そういったスタンダードを持つ社会であって彼女ではない。彼女は犠牲者にすぎないのだから。こう自己弁護した後、彼女は自分の関心が“softer passions”にある事を明言し、恋の冒険の数々を語り、読者の好奇心を満たす。そうしつつ彼女は自分こそ“softer passions”を扱うにふさわしい作家として、政治への訣別を公言する。その一方で彼女の自己弁護は、恋愛における彼女の相手への献身なり寛大さ、誠実さ、身を処する賢明さなどの強調となる。一個の人間としての彼女の正義感なり良心、誠実さは、政治的エピソードによって更に補強される。その問題の事件というのは、*The New Atlantis* は匿名出版であった為、誹謗中傷の嫌で出版者2人と印刷屋が逮捕された。彼女は3人を救うべく自ら名乗り出て下獄するというものである。ラヴモアはその経緯を次の様に語っている。

I us'd several Arguments to satisfy her Conscience that she was under no further Obligation, especially since the Profit had been theirs; she answer'd it might be so, but she could not bear to live and reproach herself with the Misery that might happen to those unfortune People: Finding her obstinate, I left her with an angry Threat, of never beholding her in that wretched State, into which she was going to plunge herself.

Rivella remain'd immovable in a Point which she thought her Duty, and accordingly surrender'd herself, and was examin'd in the Secretary's Office:⁽¹⁵⁾

このように彼女の自己弁護は、自らの良心に従って我が身を捨てて他人を救けるヒロイックとさえ言える人間という自己讃美となって完結する。それも、社会の価値観を代弁する男性（ラヴモア）の口を借りてやってのけるという工夫をこらした。

このようにマンリーの自己主張の依って立つ所は、社会や周囲の状況に左右され弱い。しかしこの弱さは逆に、生き抜く為の彼女の強さを示している。彼女は自らを称して“*The only person of her sex who knows how to live*”⁽¹⁶⁾と言っている。彼女は女性であるが故に受けた様々の抑圧の経験、苦しみを全て表現に変えペンで生きた。その人生は genteel な出身階層から転落した屈辱感と、それでも生き抜いたという自負の交錯したものであただろう。後年彼女は遺言の中で、劇作2点以外は手紙を含め全ての書き物を焼却するよう求めた。自らの人生を抹消しようとした訳である。時代に、その価値観に、男性に、生活に翻弄された女性の最後の抵抗であり、自己主張であったという感がする。

III

マンリーもモールバラ公爵夫人も社会にその人生が曝され、社会との軋轢から自己弁護する為筆を執っている。もっともマンリーは社会の疎外者として、モールバラ公爵夫人は女性としては社会の頂点に登りつめた者として、という違いはある。夫人は恵まれた境遇にあり、彼女の経験を一般化は出来ない。しかし女性としての出発点は同じであり、その自己主張の有り様は、女性の別の面を見せている。

モールバラ公爵夫人サラ・チャーチルは1660年 St Albans 近郊で、地方に勢力を振る政治家を父に生れた。母の計らいで Anne Hyde, Duchess of York の待女となり、その次女である Lady Anne の親友とも相談相手ともなる。後にアンが女王に即位すると絶大な権力をふるう事となる。1676年 John Churchill と秘密結婚をするが、彼は武勇に秀れ、スペイン王位継承戦争では1704年、プレニムでフランス軍に大勝した。しかしアン女王との関係は1710年には決裂し、一時夫妻は国外へ亡命するが1714年帰国。1722年夫死亡。彼女はその22年後死亡。

文章を物した女性の中に、教育の機会に恵まれた上流階級の女性が多かったのは当然である。しかし彼女達のアイデンティティは往々にして父親や夫や家に吸収されてしまっていた。たとえ女性であってもその社会的地位の為人々の

尊敬を集めていた為であろうし、又、一族共々歴史の重要な流れの中に身を置いていると感じる事が出来たからでもあろう。だから Lucy Hutchinson (1660-?) や Margaret Cavendish, Duchess of Newcastle (1623-73) が夫の伝記を著わしたのも納得がいく。その一方で彼女達の自伝が、ハッチンソンの場合は宗教色が強く家系を辿って彼女に至る時点で途切れており、公爵夫人の場合も自伝を書く事への弁解、娘として妻としてのアイデンティティが強調⁽¹⁷⁾されているのも無理からぬと思われる。

モールバラ公爵夫人の場合、数多く残したエッセイや手紙の中で(といっても彼女にして *feminine propriety* を守り出版してはいないが)、彼女は社会が女性に対し加えた束縛、強いた従属に強く反発しており、女性の教育の必要性を説いた。そして女性のアイデンティティに関し次の様に断じた。つまり、
 “Women signify nothing unless they are the mistress of a prince or a first minister, which I would not be if I were young;”⁽¹⁸⁾ だと。夫なり愛人なり誰か他人との関係において自己を規定する事を拒否した彼女は、自己のアイデンティティを自らの *accomplishment* に求めた。そして公けの活動の場を持つ者として、“*fame*” を求めた。*An Account of the Conduct of the Dowager Duchess of Marlborough* (1742) の冒頭の一節に次の様に述べている。文中の “*this passion*” とは *fame* を求めるそれである。

My Lord, this passion has led me to take more pains than you would easily imagine. It has sometimes carried me beyond the sphere, to which the men have thought proper, and perhaps generally speaking with good reason, to confine our sex. I have been a kind of author.⁽¹⁹⁾

夫人にとって書く事は “*fame*” を求めて活動する事の補完作業となった。自ら “*a kind of author*” と言う程、自己主張、自己弁護の為に外の世界に向けて書いた。しかし自分自身に向けて、自己の内面に問いかけてペンを執る事は無かったように思われる。彼女と外の世界の間に軋轢が生じた時、彼女にとってその原因は、そしてその責任は常に外の世界にあった。

An Account of the Conduct 自体は、自分に死が近づきつつある事を悟った公爵未亡人が、自らの名誉の為にも後世に歴史の真実を残す事を希望して、歴史家の Nathaniel Hooke をゴースト・ライターとして世に発表したものである。標題に「宮廷に伺候してより1710年に至る迄」とあるように、彼女が自己を語る時には当然の事ながら公人としての自己しか無い。その強烈な自己主張は外界を覆いつくさんばかりである。政治の世界、一国の進路を個人の野望や嫉妬、悪意や些細な術策のレベルに引きずり下す一方で、ホイッグ対トーリーの何とも単純な善悪の対立の図式がある。アン王女がウィリアム三世の怒りからモールバラ公爵夫人を守るエピソードなど、生き活きた細部も無い事はない。しかし自己正当化に満ちており説得的な歴史資料とはなりえていない。

先に述べたハッチンソンの *The Memoirs of the Life of Colonel Hutchinson* (1664-71) や、ニューキャスル公爵夫人の *The Life of The Thrice Noble, High and Puissant Prince Willian Cavendish, Duke, Marquess, and Earl of Newcastle* (1667) は趣を異にすると言われている。彼女達は女性として政治から除外されており、一国の政治レベルでの事実把握や歴史認識は覚束ないものであり、当然の事ながら夫の言動の正当化、理想化があるようである。しかしハッチンソンの伝記はノッティンガム州の地方史として、そこでの事件や人物に関して信頼するに足る資料となっており、又、公爵夫人のそれも内戦時、追放時における王党派貴族の興味深い肖像を提示している。つまり問題は、女性の自己主張のあり方とその著作の信頼性という事になってしまう。

モールバラ公爵夫人の場合、余りに強い自己主張が著作の信頼性を損ね、彼女の意図に反して、彼女の“fame”を後世に伝えるものとも、歴史の真実を伝えるものともならなかった。この彼女の自己主張のあり方、私的な自我のみ尽す圧倒的な公的自我のあり方は、社会と個人の正常な関係を樹立しえていない当時の女性の状況を反対の角度から示していると言える。つまり社会に対し卑屈に弁解的になるか、強圧的戦闘的になるかの両極端の関係である。

IV

マンリーなりモールバラ公爵夫人は言わば公人として、自己主張なり自己弁護のペンを執った。レディ・メアリ・ウォトリー・モンタギューは社会と自我の亀裂の大きかった女性であるが、社会に対して公然と声を上げる事はしなかった。そしてもとより出版の意志の無い手紙を書き続けた。

彼女は1689年ロンドンに生まれた。“Lady”の呼称は、後に父親が貴族に列せられた事による。主として家庭教師により教育を受けるがラテン語は独習。1709年親友の兄 Edward Wortley と文通を始め、父が彼との結婚契約に同意せず他の相手を押しつけた為、駆け落ち結婚をする。夫は実業家で国会議員。夫妻共に思想的にはホイッグ。1716年よりトルコ大使となった夫と Constantino-ple へ赴任の旅にのほり、*The Embassy Letters* を著した。夫の任務は失敗し1719年帰国。文学的関心から文人との交際を広め、一方で匿名の政治パンフレットを出版したり、種痘の導入に尽力する。1736年イタリア人で24才の Francesco Algarotti に恋し、1739年イタリアで彼と隠遁生活を送るべく故国を去る。彼との仲はすぐ破綻するが、以後20年間海外生活を送る。1761年夫の死を機に帰国。翌1762年乳癌で死亡。

早くから文学に関心を示していたモンタギュー夫人が14才で詩作した時、自分は女であるという事実を痛感させられた。つまり優れた詩を創作できないのは、一に女性であるから、二に教育で不利益を蒙っているから、三に14才であるから、と思い知ったのである。この時彼女は女性を当時のいわゆる“a weaker sex” “an inferior sex” と考えていたらしい。もっとも少くとも後年この考えに疑問を呈すようになる。その女性の為、特に教育と結婚の問題について彼女は終生論じる事になる。彼女自身の人生にも、そして彼女の自我の意識の展開にも、この2つの問題は大きな比重を占めていた。

当時放縦とも風変わりとも評された彼女の人生において手紙を書くという行為⁽²⁰⁾は、ある時は自己教育であり、自己主張であり、又ある時には自己確認作業であり、又他人への啓蒙の手段であったり、孤独の慰めにもなった。要するに自己の一部になりきっていた。しかし中でも自己主張、自己確認の意味合

が一際濃く感じられる。というのも社会が押しつけた規範、圧力と衝突する事の多かった彼女の人生の節目節目で、彼女は自分がなしている事の意味、自分は何者であるか等について実に明確な意識を持っていた事が窺われるからである。そして書く事はその意識を文字に定着させ確認する作業に思われるからである。あるいは多分実際の行動への踏台となる事も多かったであろう。例えば若い日の彼女がウォトリーと駆け落ちの相談をしている手紙の一節である。

But I cannot think of living in the midst of my Relations and Acquaintance after so unjustifiable a step —unjustifiable to the World. —But I think I can justify my self to my self.—

I again beg you to hire a Coach to be at the door early Monday morning to carry us some part of our way, wherever you resolve our Journey shall be.⁽²¹⁾

彼女は自分の行為が社会に受け入れられないものである事を知っている。社会と自分が対立した時、迷わず自分が正しいと信ずる道に従ったのである。

今一つ彼女の自己認識、自我の有り様を示す例を上げるなら、彼女が人生の盛りを過ぎようとする頃に陥った恋の激しさは、彼女が自己を見失っている事を示しているのではない。逆に自己の何たるかを痛い程に悟っていた事を示している。

I no longer know how to write to you. My feelings are too ardent; I could not possibly explain them or hide them. One would have to be affected by an enthusiasm similar to mine to endure my Letters. I see all its folly without being able to correct myself... What has become of that philosophical Indifference that made the Glory and the tranquility of my former days? I have lost it never to find it again, and if that passion is healed I foresee nothing except mortal ennui.

(Aug. 1736, To Algarotti)

One must have a Heart filled with a strong passion, to be touched by trifles which seem of such little importance to others. My reason makes me see all its absurdity, and my Heart makes me feel all its importance. Feeble Reason! which battles with my passion and does not destroy it, and which vainly makes me see all the folly of loving to the degree that I love without hope of return. (10 Sept. 1736, To Algarotti)⁽²²⁾

彼女の感情は社会との軋轢を生じ、理性と衝突する。その愚かさも滑稽さも、それを如何ともし難い無力さも、相手から報われる筈のない空しさも全て彼女は認識して書いている。

しかしながらモンタギュー夫人の手紙にあらわれる強烈な自我の意識、自己主張は、手紙の中だけのものであり、私的なものであった。結婚は正規の手続きをふみ教会の許可も得、父との和解も成立している。アルガロッティの許へ行く際も健康上の理由で夫の許可を得、夫から年金の仕送りを受けている。彼女の恋の顛末は当時から20世紀半ばに至る迄殆んど人々の知る所ではなかった。

彼女の強烈な私的な自我と、弱い公的自我の対照は、手紙の中だけでなく、人生の諸事実にも一貫している。彼女は社会に対し声高に何かを主張する事はなく、あったとすれば匿名であった。彼女が唯一出版を目的に書いた政治パンフレット *The Nonsense of Common Sense* もそうであり、又、種痘導入に反対する保守的な医者達への攻撃論文も *Flying Post* へ編集者への手紙として匿名で寄稿した。社会との正面からの対立を避ける妥協的態度は、彼女の女性教育論に典型的にあらわれている。彼女は教育の欠如に起因する女性の地位の低さ、政治的社会的関心の低さ、道德心の欠如を嘆き、教育の重要性を主張する一方で、結局は教育はより良き妻となる為のもの、よりよき私生活を送る為のものであり、外に対しては秘すべきものと説いた。

モンタギュー夫人にしてこのような自己主張の限界、社会への妥協的態度がみられる訳である。これは、社会的保守主義者として社会階層を是認していた彼女が、女性としてよりも“Lady”としての自己のアイデンティティに固執

したからかもしれない。あるいは女性でありながら女性を蔑視する一面を持ち、女性としてのアイデンティティの依り所の無さもあったかもしれない。あるいは早くよりきざしていた穏通生活への志向が、波乱にとんだ人生なり文人との広い交友がもたらした世間の（悪）評⁽²³⁾によって倍加されたからかもしれない。

彼女の自己主張を阻む原因が何であったにしろ、すでに23才にして社会に背を向けて自己の道を歩んだ彼女の強烈な私的自我は、いつか反乱を起さざるをえなかった。*The Embassy Letters* の辿った運命がそれを示している。恐らく実際に書かれた手紙やメモから書簡体旅行記を再構成しながら、モンタギュー夫人はそれ以前の旅行記にはない優れた特質をはっきり意識していた。ある女性に宛てた手紙で次の様に述べている。

Your whole Letter is full of mistakes from one end to t'other. I see you have taken your Ideas of Turkey from that worthy author Dumont, who has writ with equal ignorance and confidence. 'Tis a particular pleasure to me here to read the voyages to the Levant, which are generally so far remov'd from Truth and so full of Absurdities I am very well diverted with'em. They never fail giving you an Account of the Women, which 'tis certain they never saw, and talking very wisely of the Genius of the Men, into whose Company they are never admitted, and very often describe Mosques, which they dare not peep into. The Turks are very proud, and will not converse with a Stranger they are not assur'd is considerable in his own Country.⁽²⁴⁾

それ迄の旅行記は、実際に見聞していない、あるいは見聞を許されなかった事柄を欺瞞的に綴っている丈である。彼女は大使夫人という地位の為、全ゆる場所、全ゆる人間を知り得る立場にあり、旅行記作者として最適であった。彼女のこの強い自負にも拘らず、又、原稿を読んだメアリ・アステルが激賞し、出版をすすめ、その日の為に序文迄献呈したにも拘らず、彼女は頑として出版を

拒んだ。しかし恐らく自らの死を予期してイギリスへ帰国する際、死後出版されるべくその原稿を Rev. Benjamin Sowden に託した。彼女の死後数ヶ月を経て出版されたその旅行記は、彼女が生前望みながらも手に入れる事の出来なかった文学的名声を彼女にもたらず事になった。一見妥協的で弱い公的自我の有り様のもとで抑圧されていたモンタギュー夫人の私的自我は、旅行記の死後出版という形で自己主張したのである。

以上述べてきたように18世紀初頭の女性達は、教育や結婚等の問題に直面しながらペンを執った。そうして女性とはどういう存在であり、自分とは何かを模索していた。公的と私的な彼女達の自我の有り様は、形を変えて18世紀の男性の自伝、手紙等にもあらわれてくる問題⁽²⁵⁾でもあった。

注

* 本稿は日本英文学会中部支部第41回大会（1989年10月7日・於・静岡県立大学）における口頭発表に加筆修正したものである。

- (1) 出版されているいないに拘らず、初期の女性の著作の統計的研究は、Judith P. Stanton, "Statistical Profile of Women Writing in English from 1660 to 1800," in *Eighteenth-Century Women and the Arts*, eds. Frederick M. Keener and Susan E. Lorsch (New York: Greenwood, 1989) とか Patricia Crawford, "Women's published writings 1600-1700," in *Women in English Society 1500-1800*, ed. Mary Prior (London: Methuen, 1985) 宮崎芳三、水越久哉「女性作家の登場」、*Shoin Literary Review*, no. 22 (1988)などを参照。
他に Janet Todd, ed. *A Dictionary of British and American Women Writers 1660-1800* (Oxford: Basil Blackwell, 1986) は網羅されている人数が多い。
- (2) 最近の女性学の隆盛で18世紀の女性作家にも光が当てられてきた。主なものに Jane Spencer, *The Rise of the Woman Novelist* (Oxford: Basil Blackwell, 1986); Paul Fritz and Richard Morton, eds. *Woman in the 18th Century and Other Essays* (Toronto: Hakkert, 1976); Ruth Perry, *Women, Letters, and the Novel* (New York: AMS, 1980) など。
- (3) 18世紀の女性の著作を扱おうとすれば、フェミニズム批評の観点は何らかの形で入ってこざるをえないが、筆者の興味はむしろ18世紀の自伝、手紙といったノンフィ

クション文学にあり、自我の概念の芽生えなり成長にある。女性の自伝については、Eetelle C. Jelinek, ed., *Women's Autobiography* (London: faber & faber, 1986) や Patricia M. Spacks, *Imagining a Self* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1986) の中の数章などを参照。

- (4) *The Journeys of Celia Finnes*, ed. Christopher Morris, 2 vols (London; Cresset Press, 1949) I: 1. 18世紀の旅行文学の研究書は多いが、ファインズへの言及は少ない。モリスが付した Introduction が最も完備していると思われる。尚この版には、トレヴェリアンの Foreword も掲載されている。
- (5) Finnes, *Journeys* I: 2.
- (6) Finnes, *Journeys* I: 2.
- (7) Finnes, *Journeys* I: 2-3.
- (8) Finnes, *Journeys* I: 113. これはコベントリーの描写であるが、デフォアの旅行記では、主な産業の説明、Lady Godiva のエピソード、簡単な教会の説明で終わっている。勿論 dissenters への言及も、宗教色もない。
- (9) Felicity Nussbaum, "Heteroclitite: The Gender of Character in the Scandalous Memoirs," in *The New 18th Century*, eds. Felicity Nussbaum and Laura Brown (New York and London: Methuen, 1987) を参照。
- (10) マンリーの伝記については、Paul B. Anderson, "Mistress Delariviere Manley's Biography," *Modern Philology* 33 (1936): 261-78. 及び、彼女の作品から自伝的箇所を選び出し編集して自伝にまとめあげた、Fidelis Morgan, *A Woman of No Character* (London: faber & faber, 1986) 等がある。
- (11) スウィフトのマンリー観については、彼女が Lord Peterborow に政治的書き物に対する報酬を求めた時に、傍らから助けを差し出した事、"a great deal of good sense and invention" と賞めた事等が *Journal to Stella* に散見される。
- (12) Gwendolyn B. Needam, "Mary de la Riviere Manley, Tory Defender," *Huntington Library Quarterly* 12(1948-49): 253-88には、性的スキャンダル暴露によらない彼女の政治活動が述べられている。
- (13) Mary Delarivière Manley, *Secret Memoirs and Manners of Several Persons of Quality, of Both Sexes from the New Atlantis* (London: n. p., 1709) 190-91.
- (14) Mary Delarivière Manley, *Adventures of Rivella* (London: n. p., 1714) 7-8.
- (15) Manley, *Adventures* 112-13.
- (16) Manley, *Adventures* 120.
- (17) Margaret, Duchess of Newcastle, *A True Relation of My Birth, Breeding and Life* (1667)

の最後に “I verily believe some censuring readers will scornfully say, Why hath this Lady writ her own life? since none cares to know whose daughter she was or whose wife she is,.... not to please the fancy, but to tell the truth, lest after-ages should mistake, in not knowing I was daughter to one Master Lucas of St. Johns, near Colchester, in Essex, second wife to the Lord Marquis of Newcastle;...” (*The Life of William Cavendish, Duke of Newcastle*, ed. C. H. Firth [London: George Routledge & Sons, n. d.] 178) という文章がある。

- (18) Sara, Duchess of Marlborough, *Memoirs of Sara, Duchess of Marlborough*, 2 vols ed. William king (London: George Routledge & Sons, 1930) 2 : 331–32. 尚この本には *An Account of the Conduct of the Dowager Duchess of Marlborough* と *Opinions of Sara* が収められている。
- (19) Duchess of Marlborough, *Memoirs* 1 : 4 .
- (20) 18世紀には、Horace Walpole, Thomas Gray, Lord Chesterfield 等優れた letter writers を輩出した。研究書としては、Howard Anderson, Philip B. Daghlian, and Irvin Ehrenpreis, eds., *The Familiar Letter in the Eighteenth Century* (Lawrence; Kansas UP, 1966) Bruce Redford, *The Converse of the Pen* (Chicago and London: Chicago UP, 1986) 等を参照。
- (21) *The Complete Letters of Lady Mary Wortley Montagu*. 3 vols, ed. Robert Halsband (Oxford: Clarendon, 1965) 1 : 161.
- (22) Montagu, *Letters* 2 : 500–501, 2 : 502. なおアルガロッティへの手紙はフランス語によるものが殆んどである。英訳は Spacks, *Imagining a Self* p. 85 を参照した。
- (23) 例えばウォルポールは機会ある毎に彼女をやゆ批難している。*Letters of Horace Walpole*, 7 vols Peter Cunningham ed. (Edinburgh: John Grant, 1906) 2 : 271. 1 : 55. 等を参照。又、一時期親交のあった Alexander Pope と仲違いし、彼の *Of the Characters of Women* に登場させられる事になった経緯については、Robert Halsband, *The Life of Lady Mary Wortley Montagu* (Oxford: Clarendon Press, 1956) 147–52. に詳しい。
- (24) Montagu, *Letters* 1 : 368.
- (25) 例えば強烈な自我の持ち主であったポーブは詩人としての公的自我に私的自我を吸収、一致させている感がある。Edward Gibbon も自伝において、歴史家としてのアイデンティティを強調した。